



東京多摩プロバスニュース

第 49 号

■事務局：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方 ■編集・発行：広報委員会 2013. 7. 3

■電話・FAX (042) 338-7022 ■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

キャリアと特技を活かし、次の世代に引き継ごう

第 107 回 定例会

日 時：平成 25 年 5 月 1 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：関戸公民館第 2 学習室

出席者：30 名(会員数 35 名)

第 108 回 定例会

日 時：平成 25 年 6 月 5 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所：関戸公民館第 2 学習室

出席者：30 名(会員数 35 名)

理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする

◇◇◇ ごあいさつ ◇◇◇

「すまいのかたち」

会計担当理事 山田正司

最近、終の住処としての「すまいのかたち」についてあれこれ考えています。御存じのように我が国の住宅事情は、戦後の復興、経済発展と共にすさまじい早さと変化で展開されて来ました。団地、集合住宅設計を主たる生業としていた私自身はその奔流にさらされて来たと言えます。

団地やニュータウンが盛んに建設されていた頃、世間には「すまいの双六」という風潮がありました。振り出しは地方出身の独身者が木賃アパートへ入居し、結婚してコンクリートアパートへ、子育てに環境の良い団地暮らし、広めの分譲マンションへ、そして最後に庭付き一戸建て住宅でめでたく上がりとなる構図です。そんな風潮に複雑な思いを抱きながら、集合住宅の充実化は社会的使命と心得、質の向上や多様性の追求に邁進しました。

タウンハウス(庭付き集合住宅)、コーポラティブハウス(居住者の設計参加)、フリースタイル住宅、高齢化が進むとバリアフリー住宅、ケアサービス付住宅、2世帯住宅、最近ではシェアハウス(共同生活型住宅)等々「すまいのかたち」は実に多様です。

かつての庭付き独立条件よりも、むしろ安全・快適・個性化が重視され、昨今ではますます住機能の高度化が進んでいます。著名な建築史家の鈴木博之氏は「建築の機能×寿命＝一定」との仮説から、技術・機能主義の行き過ぎを戒め、芸術文化の重要性を説いておられます。私の解釈では「すまいのかたち」にも自ずとその生活者独自の文化性があらわれているように思えます。

私達の地元多摩にはニュータウンも含めて多様な「すまいのかたち」が溢れています。願わくば市民も街も、輝かしい文化性に満ちた暮らしの場であり続けて欲しいものです。



新緑の息吹き漲るトウカエデ並木 (多摩市落合南通り)

◇◇◇ 幹事・委員会・プロジェクト報告 ◇◇◇

1. 幹事報告

関根正敏幹事

1.1. 「会友」に関わる会則改定について

種々の事情により退会された会員を「会友」として処遇するための会則新設について、4・5月定例会での会員意見の聴取を経て、このほど理事会案が纏まり7月の定期総会に上程する運びとなった。

1.2. 第17回八王子プロバス生涯学習サロン

5月9日に閉講式および懇親会が開催され、当クラブから中村会長、増山副会長、稲田広報委員長、神谷副幹事が出席した。

2. 委員会報告

2.1. 総務委員会

北村克彦委員長

1)5月度定例会(5月1日)、卓話;菊池宣子会員による「私とお茶」のテーマでお手製のお菓子を頂きながら拝聴した。

関連記事P3参照

2)6月度定例会(6月5日)、卓話;鈴木泰弘会員による「ヤマハあれこれ」のテーマで「ヤマハ」の歴史や事業の開発、音楽教育への取組みなど、音楽を交えながら拝聴した。

関連記事P3参照

2.2. 研修・親睦委員会

上田清委員長

1)日帰り研修旅行(横浜・山下公園);5月15日(水)、参加者16人が横浜の名所旧跡を見学。 関連記事P4参照

2)懇親会;7月3日(水)、京王クラブにて総会・定例会後に懇親会を開催予定。

2.3. 地域奉仕委員会

滝川道子委員長

1)5月10日(金)、地域奉仕委員会

一年間の活動内容と次年度の検討を行う。

2)6月28日(金)、志学サロンの第8回日本の伝統文化サロン「茶道 お濃い茶の頂き方」を講師森川静子会員で開催。

伝統文化サロンは、はや8回を迎えました。毎回大好評をいただき、第7回「お薄の頂き方」では19名の出席者で賑わい、全員が初めての茶道に触れる機会を得、その後多摩市の月釜に数名の方が出席されました。

2.4. 広報委員会

稲田興委員長

1)プロバスニュース第49号の発行・配布

7月3日発行を目標に、5月8日第一回編集会議を開催し、作成スケジュール並びに編集方針を決定。5月29日理事会で編集方針を説明し承認を得た。以降6月5日原稿作成依頼、6月19日原稿締め切り、6月24日第二回編集会

議、6月26日第三回編集会議を経て、6月30日版下最終原稿を完成させ印刷する。

2)ホームページの更新

最新の活動内容などを盛り込み隔月で更新をしている。今回は5月15日に実施。



広報委員会の皆さん

3. 創立10周年記念事業プロジェクト 大澤亘リーダー

当チームでは検討の結果、創立10周年の記念行事として山田正司会員の提案による「多摩プロバスかるたの作成」に全員で取り組むこととした。これは完成までに相当の日数を要することから一刻も早く具体的な作業に入れるよう、最終報告書を予定より2ヶ月繰上げ、平成25年4月24日の第10回理事会に提出し、5月1日の定例会で全会員にもその概要を報告して、その任務を終了した。

今後は新たに山田会員をリーダーとする「かるた作成チーム」が直ちに具体的な作業に入る。かるた作成以外の準備については、次年度の各委員会がこの最終報告書に基づいて分担して取り組む。

最終報告書の内容のうち主なものは次の通り。

1) 記念式典・祝賀会

①期日 創立10周年記念日は平成26年5月18日(日)であるが、記念式典・祝賀会は5月16日(金)に開催する。

②会場 交通の便、分かり易さ、距離の近さ、会場の広さと設備の状況、予算額等の諸事情を総合的に考慮して多摩センターの「桜美林アカデミーヒルズ」を第一候補とする。

③記念講演 当クラブの山田正司会員に委嘱する。

④その他 会員の茶道の先生方が抹茶サーブを行う。

2) 記念行事

上記「多摩プロバスかるたの作成」のほか、関戸公民館との共催による市民企画講座を検討する。

3) 広報活動

①記念誌「10年の歩み(仮題)」を発行する。

②当クラブのパンフレットとホームページを刷新する。

③式典・祝賀会の当日、会場で当クラブの活動をパワーポイントとビデオ映像で紹介する。

◇◇◇ ハッピーバースディ ◇◇◇



誕生日を迎えられました。

写真左; 左から5月誕生の

永田宗義・森川静子会員

写真右; 左から6月誕生の

北村克彦・滝川益男会員



1. 私とお茶

菊池宣子会員

ひと言に御茶といひましても「おーいお茶」(失礼)から厳かに点て、神仏に供える御茶までさまざまあります。私の中でお茶といえば後者に近付きたいと思っています。

これはなかなか難しく一筋縄には参りせん。まず心身を整え清浄に、お道具も整え清浄に、そして無の状態に……。この無の状態が難です。始めは努めて無になる努力をしますので続きますが、いつの間にか、ほんとにいつの間にかいろんな雑念が頭の中を駆け巡ります。無とは程遠い状態です。気が付いてまた努力、この繰り返しです。

母に勧められるまま始めた茶道、何の疑問もなくお点前の順序を覚え、お道具の扱いを覚え、順に許状もいただきました。結婚後、奈良でお世話になりました先生いわく「もう資格があるのですからどんどん教えなさい」先生は私をご覧になっていて、ただお稽古に通っていて歯がゆい、もっと仕込まなければと思われたのか、人に教えて苦労しなければこの人は上達しないと思われたのか、今となっては知る由もありませんが、私には驚きの言葉でした(当時23歳)。でも教えるということは責任がありますから真剣になります。お稽古に対する態度も変化します。お家元も常々人様にお教えることは自分が教わること、茶道に興味をお持ちの方には、自分が学ばせていただく気持ちにな

2. 「ヤマハ」あれこれ

鈴木泰弘会員

ピアノ、オートバイで知られたブランド「YAMAHA」は創業者山葉寅楠の名からきている。

医療器械や時計の修理を学んだ、紀州生れの彼は、浜松の小学校の壊れたオルガンを修理したことから、国産化を思い立ち、明治20年に第1号のオルガンを作り、「日本楽器製造株式会社」を設立、「ヤマハ」の基礎を築いた。

戦前、戦後の混乱期を経て、昭和25年に社長に就任した川上源一という強いリーダーのもと、楽器事業に限らず新事業を展開し、昭和62年100周年を機に、社名を「ヤマハ株式会社」に変更した。

プロバスニュース紙上では、川上社長の始めた新事業の一つ、音楽教室について紹介します。

昭和28年、社長は3ヶ月に亘り欧米視察に出ますが、談話の中で次のように言っています。

「イタリアでは同じ敗戦国というのに、ハイキングに行く若者たちがギターを背負い、皆で楽しく歌っていた。ブラジルでは夕食後に家族の素晴らしいアンサンブルで歓迎してくれた。帰国してから、町を歩いていてふと思った。どこからも家の中からピアノやオルガンの音が聴こえてこない。売り上げが悪いのかと言えばそうではない。オルガンなどは月に2,000台以上も売れている。親は情操のためといって楽器を子供に買い与えるが、演奏家を育てる教

って接して下さいとおっしゃっています。



お稽古も年数が経ちますと、お点前・作法は自然と体が覚えてくれますが、精神的なことは自分の努力が一番必要になります。また、お点前・作法は指導しているだけでは駄目で、先ず自分で動いて切磋琢磨しなければ前進はありません。でないといまでの積み重ねも退化するばかりです。

何でもそうだと思いますが終わり

(命の)まで修行・努力が不可欠です。若い頃は素直になれませんでしたさまざまなこと、齢を重ねますと共にその大切さに思いを深め、常に心の中にあるよう努めねばと思えますし、何事にも落ち着いて取り組み、一段深く考えを巡らせるようにもなりますし、感謝の一言です。

この後も素晴らしい伝統文化・総合芸術といわれます茶道に身を置き、少しでも精神的に前進できますよう励んで行きたいと思っています。

この原稿を書き終えた頃、某新聞に掲載されました千玄室(裏千家先代お家元)様のお言葉「……到達する道のりは遠い。私もわかっている、なかなか実行できなかった」を目にして、少し救われた気が致しました。

育法しかないために、退屈で難しいレッスンを強いられて



永続せず、音楽をやめてしまうのだ。こんなことでは苦労してピアノやオルガンを作る甲斐がない。音楽は楽しいものだ、その楽しみ方を考えるのも楽器会社の使命ではないか」と。

音楽教育の研究を進めるうち、基礎は4~5歳の幼児期が最も重要であり、「やさしく、楽しく、正しく」を掲げた音楽教室を展開させた。

ただヤマハは楽器を売るために、教室をやっているのではないかという偏見に対し、教室活動を恒久的、公益的に続けていくために、営利追求の株式会社から切り離し、昭和41年「財団法人ヤマハ音楽振興会」を設立したのです。

振興会では教材やカリキュラムなど教育内容の研究、講師の育成、研修の実施により常に教育レベルの向上に努めています。

そしてこの教育システムや講師のもとで、子供の音楽性が磨かれ、中には大きな才能を開花させた子供たちも生まれてきています。

さらに若者向けにポピュラーミュージックスクールや、大人向けの〇〇教室なども展開し、音楽の裾野を広げています。

◇◇◇ 委員会の活動 ◇◇◇

日帰り研修旅行「横浜・山下公園」 鈴木達夫会員

5月15日(水)に研修旅行を行なった。参加者16名うち女性2名で、JR横浜線橋本駅に8時30分に集合した一行は、みなとみらい線で予定の時刻10時過ぎに馬車道駅に着いた。素晴らしい五月晴れの好天に恵まれ、横浜港が一望できる山下公園の一面に位置する、最初の見学地「北朝鮮工作船展示館」へ。館内には2001年12月に発生した九州南西海域工作船事件で、わが国の巡視船と撃ち合いのあった後、自爆して沈没した工作船とその武器、装備品が展示され、当時の説明を受け40分の研修見学を行った。

次にレトロな雰囲気漂う文化商業施設である「横浜赤レンガ倉庫」2号館(明治41年建設)へ。横浜ランドマークタワーを背景に記念撮影……。



そこから、斬新な構造の空間美で、日本を代表する海の玄関「横浜港大さん橋国際客船ターミナル」へ。

白亜の豪華客船ロイヤルウイング(2,876トン、630名収容)を背景に記念撮影後、乗船し、昼食は船内の個室で広東料理のバイキングを賞味しながら歓談のひと時を過ごした。横浜港でクルージングを楽しんだ後、日本初の臨海公園「山下公園」へ。「赤い靴はいていた女の子像」「カモメの水兵さんの歌碑」を見学し「沈床花壇」へ。花壇のバラがちょうど見ごろで鮮やかであった。



歴史博物館として「日本郵船氷川丸」を見学。昭和5年(1930年)のシアトルに向けての初航海を皮切りに30年間で254回北太平洋を横断していた。現在、一等食堂、一等特別室、船長室、機関室など公開され、往時をしのばせてくれた。

最後は、横浜のシンボルの「横浜マリンタワー」。高さ94mの展望フロアからは横浜港のパノラマが広がり、満足感を感じつつ、予定の時刻4時にみなとみらい線の元町・中華街駅で解散、大変有意義な6時間の研修旅行を終了した。



横浜マリンタワーからベイブリッジを望む

◇◇◇ 多摩地区3クラブ交流会 ◇◇◇

1. 八王子プロバスクラブとの囲碁交流会

上田清会員

去る5月3日(金)堀内陽二会員・関根正敏会員・上田の3名が八王子プロバスクラブ囲碁サークル主催の「囲碁大会」に参加してきました。総勢14名が午前10時頃から午後4時頃までに5回戦を行い、堀内会員が優勝、関根会員が3位という好成績を収めました。ちなみに小生は8位と完敗致しましたが、勝敗はともあれ、楽しい時間を共有することができて感謝しております。

また、こうした交流会を通して近隣のプロバスクラブ間でより一層親睦を深めることができれば、プロバスクラブらしい広域的な活動が促進されるものと思っています。



囲碁交流会に参加した皆さん

お世話をいただいた八王子の吉田会長を始め会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

2. ゴルフ交流会

鈴木達夫会員

5月23日(木)に第一回多摩地区3プロバスクラブ(八王子・日野・多摩)のゴルフ交流会を八王子プロバスクラブの案内で八王子郊外の相武カントリークラブで行った。参加者は21名、八王子8名、日野9名、多摩4名(北村克彦・登坂征一郎・増山敏夫・鈴木達夫各会員)で素晴らしい好天に恵まれ、アウト・イン3組毎に8:49にスタート。コースは新緑に囲まれた風光明媚なコースで、全長5,799ヤード、競技方法は新ペリア方式、全ショートホール(5ホール)をニヤピンとして競技を開始した。

競技終了後、コンパルームにて表彰式とパーティーを行った。和気藹藹の中で盛り上がり、親睦を深めることができた。成績は次の通りでした。

優勝：杉山友一(八王子) 準優勝：河合和郎(八王子) 3位：鈴木達夫(多摩) ニヤピン賞：多摩が5ホール中3ホール獲得(北村・増山・鈴木)。

◇◇◇ サークル活動 ◇◇◇

笹句会・水芭蕉の乗鞍旅日記 増山敏夫会員

5月13・14日「山つつじの会」のお誘いで、由利雪二先生の句集「乗鞍高原の兔の足跡」の世界追体験の旅に出かけた。山つつじの会(抜講・石川春兔さんが所属)10名、笹句会7名、他2名計19名。朝、桜ヶ丘を出発、中央高速・松本を経て一路乗鞍へ。バスの段取り、宿の手配など、すべて山つつじの会のお世話になった。

快晴、甲斐・木曾の野山は万緑、松本で高速を下り乗鞍に向かう。梓川に沿って高度を上げる山道はまだ緑の点描が始まったばかり、初々しい新緑である。昼過ぎ乗鞍高原に到着。春兔さんの指示で、せせらぎに飲物の缶を冷やす。溪流は手が切れるほど冷たい。澗みに銀色の缶が躍る様は解放感に満ち気持がよい。鉄板からは肉、野菜の焦げる匂いが立ち上り、食欲をそそる。切株やベンチに陣取り、いつの間にか賑やかなバーベキューが始まった。前日から乗鞍入りの「からまつ」誌写真家・常盤氏がタンポポ、コシアブラ、蕨のとうなど、手際良く揚げて振舞う。高原の風が心地よい。溪流沿いの白樺は新緑はまだ疎ら、圧倒的な青空だ。そして黒い稜線が顔を出したばかりの乗鞍岳。食後は高原散策、雪の重みから解放された水芭蕉の群生を観る。白樺の丘陵を縫う清流に帯を解いたように浮かぶ様は見事。真青な空、千切浮ぶ白雲、そして乗鞍の白嶺。始まったばかりの高原の夏だ。夕刻宿で白骨温泉からの真白な引湯に身を沈める。

新緑の煙る中なる乗鞍路

息を呑む白き精霊水芭蕉
緑さす白骨の湯の真白かな

夕食は女将心尽くしの山菜料理に舌鼓を打つ。食後にイベントがあり、常盤氏の写真絵巻「植物界からのご挨拶」と雪二先生との「写真と俳句のコラボ」が映像で紹介され、写真と俳句、お二人の対象との距離感に興味を抱く。翌朝雪二山居へ。足元の二輪草を指し「花は上下に二輪咲く」との解説に頷く。

絵本読みママも寝入りぬ二輪草

帰路梓川の源流・上高地へ。快晴、帝国ホテルでの昼食前、河童橋まで足をのばす。まだ残雪が見られ、眼前の穂高は一昨年訪れた時より白い。岡野さんがスケッチを始める。肝心の筆を忘れ、何とハンカチを濡らして筆代わりに使う。「弘法筆を選ばず」ならぬ「筆を使わず」、さすがのハンカチ捌きである。これには樹上で我が物顔に新芽を食い荒らしていた猿の群もビックリ?退散。

木の芽食む猿ゆうゆうと河童橋



岡野一馬会員のハンカチ捌きのスケッチ「上高地点景」

◇◇◇ 会員の活動 ◇◇◇

1. タマピカル「八王子オヤジバンド・フェスティバル」に出演 稲田興会員

毎年八王子市の南大沢駅周辺で行われる「フラワーフェスティバル」の一環として「オヤジバンドフェスティバル2013」が今年も4月27日(土)南大沢文化会館交流ホールで開催された。5倍もの競争を勝ち抜いて中村現会長率いる“タマピカル”が5グループの一つに選ばれ初参加。一グループの持ち時間は30分で、タマピカルは4番目の出演。矢沢やベンチャーズなどを模した曲が150名も入ると溢れんばかりのホールを揺るがしながらエレキをガンガン奏でた後、出番が回ってきた。女性4名・男性4名構成のタマピカルは、女性ボーカリスト二人のハーモニーを軸に幅広いジャンルの歌を披露。出だしはそれまでの大音響に圧倒されたのか、或いは緊張気味だったのかちょっとノリが良くなかったが、徐々に調子を上げて“ため息の出るようなあなたのくちづけに……”で始まる「恋のパカンス」が流れる頃には、聴衆一同うっとりと思い出顔で聞き入っていた。「オヤジバンド」という名のもとに妙齢の女性が混じって演奏しているには

何か可哀そうな気もするが、それでもみな楽しそうにハモッている姿には、微笑ましさを感じさせられた。

2. 「侘助」の野点 神谷真一会員

桜の季節にしだれ桜で有名な唐木田の古民家を借りての野点席は4年目を迎えました。今年には桜の散るのが早く背景に桜はなく、集合写真は場所を変えてのもので。先生方の桜の如き愛らしき着物姿を中心に、男性会員が日頃の感謝をこめての一こまです。当クラブの中には男性会員7名と多摩市茶道連盟の先生方も4名おられます。

男性茶道の会「侘助」は15名の会員で毎月一度の例会



「侘助」の会員の皆さん

を楽しみながら学んでいます。会の名前「侘助」とは、唐椿の一種で花は一重、いかにも侘びた姿を示すところから茶花として好まれています。

◇◇◇ 私のニュータウン ◇◇◇

「緑豊かな町を」

永島仁会員

私が多摩ニュータウンに転居したのは昭和55年5月からだから34年目を迎えたことになる。昭和60年に定年退職するまでは地元との縁は殆どなかった。朝7時に家を出て夜は深夜に及ぶこともしばしばだった。従って緑豊かな風景など楽しむ余裕などなく、その上、年かきの故をもって住宅管理組合の初代理事長を任されていたために多忙を極めていた。退職してようやく心身ともに若干の余裕ができて何かをやらねばという気持ちになった。

折しも中国で砂漠の緑化活動をしていた遠山正瑛氏(中国の砂漠を甦らせた奇跡の男として有名)の内モンゴルのクブチ砂漠の植林活動に参加してからは、急に緑化活動に興味を持つようになった。プロバスの新人会員プレゼンテーションの折にも「沙漠緑化活動」の話をさせていただいた。おかげで多摩ニュータウンの緑豊かな風景をも見直すことができるようになった。



プレゼンテーション中の筆者(中央)

多摩ニュータウンの中でも、私の住んでいる地域は南欧風の建物をイメージして造られたもののだそうである。

入居当初はまだ開発初期のこともあって、自然が豊富に残り野鳥の姿が多く見られた……が、大型重機で山や丘は削り取られ、樹木は惜しげもなく切り倒され、土砂が舞い、エンジンの騒音で野生の動植物の住処は次々と失われていった。それでも工事のない日祭日には、雉・山鳥・ホホジロ・コゲラ・メジロ・ウグイス・シジュウカラ等々が軒先にやってきて、餌をついばむ姿が見られ、夏には蝉が騒々しいほどに鳴き、夜には鈴虫やクツワムシが鳴き、涼を誘ったものだ。

開発が進むにつれて、鳥や虫の声が途絶え、ほとんど聞えなくなったのは残念である。豊かな自然と緑は何よりの宝である。緑はCO₂を吸収するばかりでなく、何よりも人の心を和らげるからだ。

いつまでも調和のとれた緑豊かな多摩ニュータウンであってほしいと願うものである。

注記:多摩市は全国有数の公園面積(14 m²/人)を誇っている。

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

広報委員長を引き受けてはや1年、委員全員の努力の結果、都合6回のニュースを発行することができた。

「読んで楽しい広報誌」を目標に、毎回掲載内容を検討しながらの編集であったが、素晴らしい技能を持った委員に恵まれ、スムーズに活動できたことは幸甚だった。

会員の方々には無理を承知で寄稿を依頼し、皆さま方の過去を振り返り、あるいは多摩に寄せる想いを書き綴り、特に巻頭言では理事の方々に自分の思いを述べていただき、読み物としては「私の一品」と「私の多摩ニュータウン」をシリーズで取り上げ、身近な話題に取り組んだ。また表紙を飾る写真は「多摩市の街路樹」と銘打って、四季折々の風景をとらえ、これもシリーズ化させた。

今号までに「私の一品」は15回、「私の多摩ニュータウン」は7回、「多摩市の街路樹」は14回を数える。

このような構成内容での編集であったが、その現れで会員を互いに知るための良き媒体ともなり、執筆内容が記録として半永久的に残る情報誌としての役割をも果たせたのではないだろうか？

「何かをね 忘れたことは 覚えている」「久しぶり 名が出ないまま じゃあまたね」等という川柳が、心から笑えなくなってきているこの頃、色々なことを記録として残しておくことは良いことであり、そのお手伝いができることに意義を見出し、これからも広報活動に携わっていきたい。

広報委員長 稲田興

◇◇◇東京多摩プロバスソング◇◇◇

作詞 池田 寛
作曲 中村 昭夫

聖の桜仰ぎつつ 多摩の流れに身を清めて
緑の柱に囲まれた 我が故郷の行く末と
社会奉仕に力をそそぐ
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

霊峰富士を仰ぎつつ 心の業を磨き合い
豊かな知識身につけて 次の世代の若人の
教え導く糧となる
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ